

栗焼棒遺跡出土の掘立柱建物跡について

半澤 幹雄

はじめに

昨年度に発掘調査を実施した栗焼棒遺跡からは、大規模な掘立柱建物跡2棟を検出し、その成果については『千葉県文化財センター年報No19』(註1)に報告したところである。しかし、筆者の不勉強もあり、その重要性を十分に伝えることが出来なかったと思われる。そこで、ここに新たな資料の提示を行うとともに、その重要性について、再度、述べることにしたい。

遺跡の位置と環境

栗焼棒遺跡は、山武郡山武町矢部字日向497-1ほかに所在し、作田川中流域北岸の標高約50mの台地上に位置している。本遺跡の東側、同一台地上には駄ノ塚古墳で著名な板附古墳群が隣接して所在している。また、奈良・平安時代の遺跡については本遺跡の北西2kmには鐘鈴の出土した野出山遺跡などの荒追遺跡群が所在し、東3kmには真

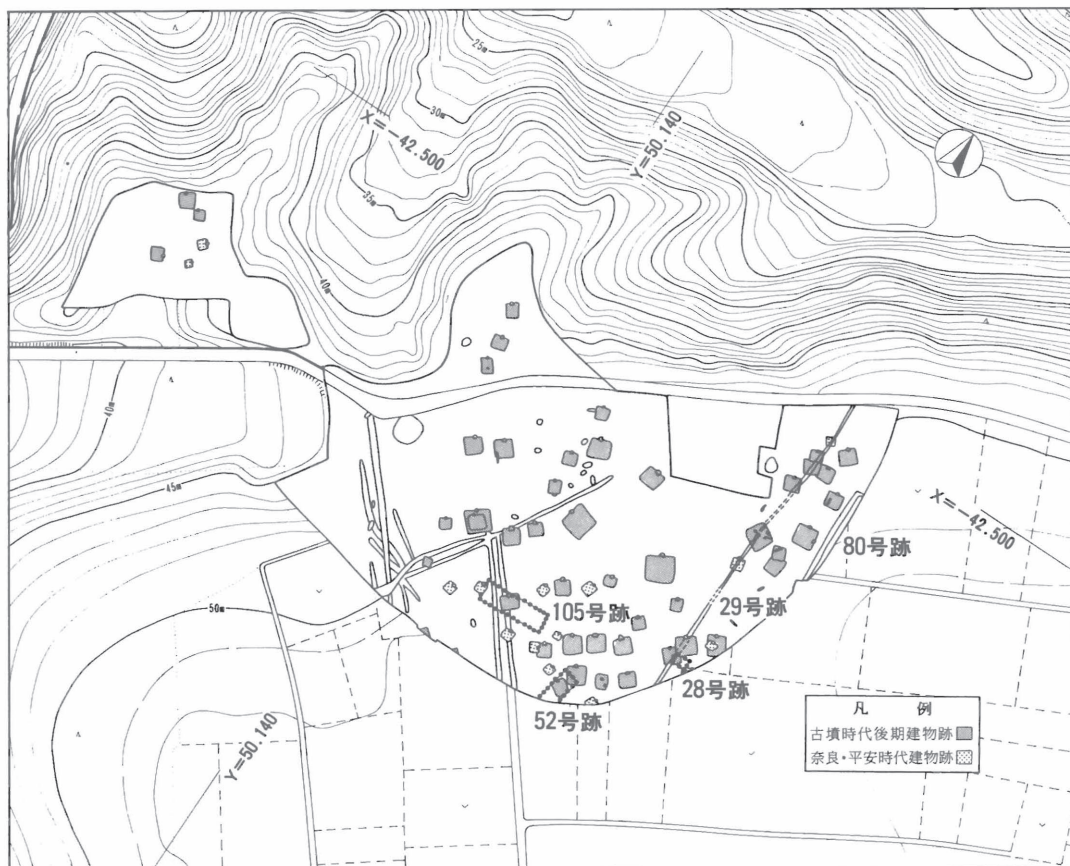
行寺廃寺跡が、北東4kmには小川廃寺跡が、南東1kmには湯坂廃寺跡が、北4kmには埴谷横宿廃寺跡が所在している。

調査概要

発掘調査は平成5年1月から平成6年3月まで実施された。調査開始時点では台地先端部の痩せ尾根を調査対象外として対象面積13,500㎡に対して確認調査が実施された。調査の結果、台地北辺中央部に緩傾斜の埋没谷が確認され、この埋没谷を除く11,400㎡が本調査範囲として調査が実施されることとなった。その後、痩せ尾根部からも竪穴建物跡(註2)が確認され、協議の結果、痩せ尾根部を追加した15,200㎡に対し上層本調査を行った。上層本調査により調査された遺構は古墳時代後期の竪穴建物跡52棟、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、平安時代の竪穴建物跡13棟のほか、溝11条、塚1基である。



第1図 栗焼棒遺跡と周辺遺跡 (1:100,000)



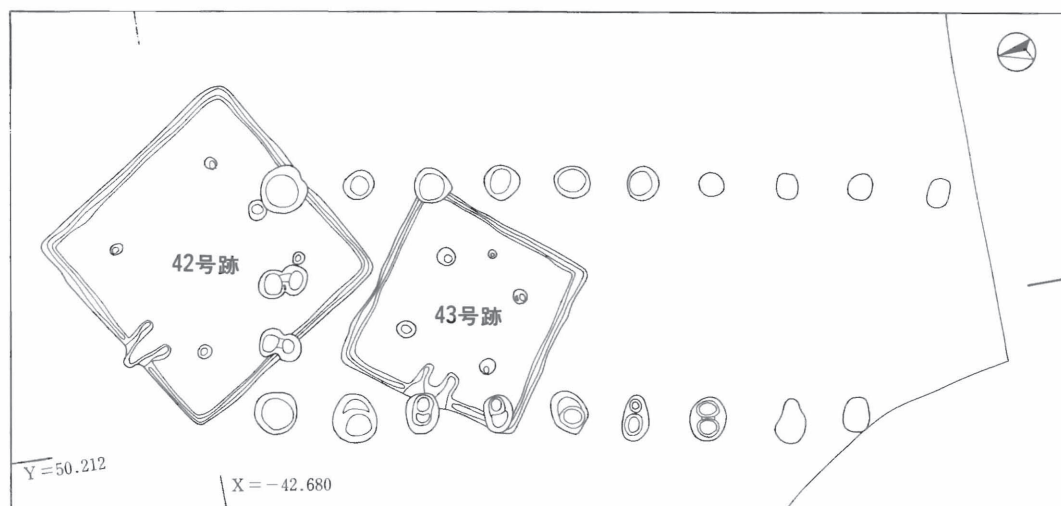
第2図 栗焼棒遺跡遺構配置図 (1:2,500)

遺構と遺物

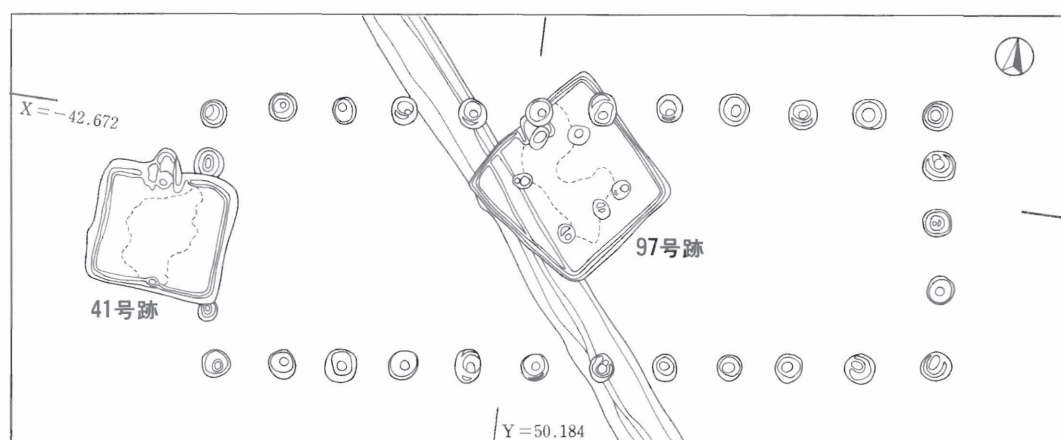
28号跡は調査区東南隅に位置している。梁行方を $N-19^{\circ}-W$ にとり、3間 \times 2間(4.2m \times 4.2m)の側柱構造の掘立柱建物跡である。柱穴は円形を呈し、直径約0.6m \sim 0.8mである。古墳時代後期の竪穴建物跡3棟(23号跡・24号跡・25号跡)と重複しており、やや不明瞭ではあるが竪穴建物跡の覆土内より柱穴が確認されている。これにより、28号跡はこれらの竪穴建物跡よりも新しい時期のものと考えられる。

52号跡は調査区南端に位置する掘立柱建物跡であり、桁行方向を $N-10^{\circ}-E$ にとる側柱構造の南北棟である。桁行方向が調査区外へと伸びており、建物跡の規模を確認するために、土地の所有者である川島忠史氏の協力を得て、調査を行なったが南端で攪乱を受けているとともに道路が横断しており、調査期間との関係からも調査を継続す

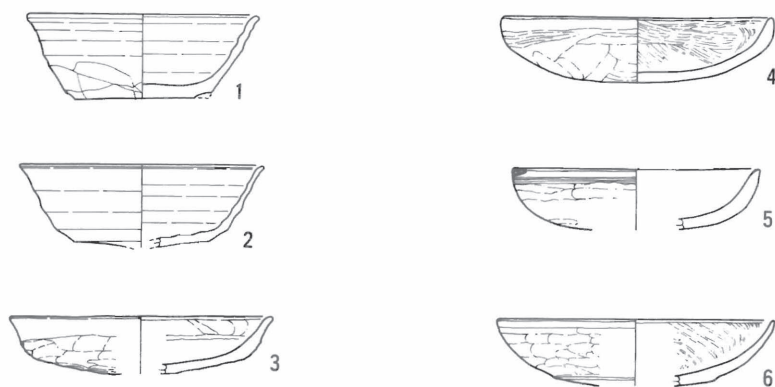
ることが不可能であったため、その全容を明らかにすることはできなかった。しかし、梁行3間、桁行10間以上(11.6m \times 6.3m)の大規模な掘立柱建物跡であることが明かとなった。柱穴の一部は隅丸形状を呈しているが、ほとんどの柱穴が円形である。隅柱穴の規模が大きく径約1.2m、その他の柱穴は0.6 \sim 0.8mで、梁行方向の中央2柱穴の間は1.5m、隅柱穴の間は、それぞれが2.0mと2.8mである。桁行方向の柱間は約1.9mである。北側梁行方向の中央2柱穴と西側桁行方向の柱穴は外側に拡張した痕跡がうかがわれ、特に梁行方向の2柱穴は顕著である。柱穴は古墳時代後期の竪穴建物跡(42号跡・43号跡)を切ってつくられている。特に43号跡についてはそのカマドの煙道部を壊して柱穴が掘られており、柱穴内の埋め戻し土に山砂および焼土が含まれていることから、竪穴建物跡を切って造られたことがあきらかである。52号跡(掘立柱建物跡)は42号跡、43号跡よ



第3図 52号跡実測図 (1:200)



第4図 105号跡実測図 (1:200)



第5図 竪穴建物跡出土遺物実測図 (1/4)

りも新しい時期のものであると判断される。

105号跡は11間×4間(19.2m×6.8m)の掘立柱建物跡で、梁行方位をN-6°-Wにとる側柱構造の東西棟である。柱穴は円形を呈し、すべてほぼ同じ規模である。西側棟持ち柱は、41号跡(竪穴住居跡)と重複しており、41号跡の調査時には全く確認されなかったため、41号跡により欠損したものと判断される。桁行方向の柱穴間は約1.8m、梁行方向の柱穴間是不均等で、1.3m~2.0mで棟持ち柱の柱穴とその両側の柱穴の間がやや広くつくられているようである。

29号跡(溝)は調査区の東側を南北(N-2°-W)に横切る溝で、下端幅約0.4mである。深さは深いところでも0.2mほどと浅く、断面形態については不明である。溝は調査区の南端では、調査区外へと続いており、調査区の北側においては途切れながらも、ほぼ調査区北端まで続いていたと考えられる。溝は古墳時代後期の竪穴建物跡の覆土上面より検出されており、これらの建物跡よりも新しい時期のものであると判断された。また、中央付近で平安時代前半の竪穴建物跡と考えられる32号跡と重複していた。竪穴建物の床は比較的軟質であり、明確に判断出来ないが、床面の清掃後検出された黒い部分が溝の痕跡として考えられ、溝は32号跡よりも古い可能性がある。よって、29号跡は古墳時代後期から平安時代前半までのものと考えられる。

80号跡は、調査区の東端で検出された南北に走る溝であり、その主軸方向はほぼ真北のN-1°-Wである。溝は調査区南端から30mほどのところで、直角に折れており、両端ともに調査区外へと続いている。溝の深さは0.5mから0.7mで中央部が深く、溝の断面形態は上端幅0.9m、下端幅0.5mの逆台形を呈している。

41号跡は105号跡の西側に位置する竪穴建物跡である。105号跡が確認される以前に調査されたため、105号跡のとの関係はやや不明瞭であるが105号跡の棟持ち柱を切って造られたと考えられる。主軸方向をN-6°-Eにとり、南北3.2m、東西3.5mの隅丸方形を呈する。カマドは北壁、西よりにつくられており、南側中央部周溝付近に柱穴がみられる。他に柱穴はつくられていない。第5図-1・2は41号跡の出土遺物である。1はクロロ土師器の坏である。口径12.2cm、底径7.0cm、器高4.5

cmで、体部下端に手持ちヘラケズリを施す。底部は定方向のヘラケズリを2回、方向を変えて施してある。なお、底部が一部剥落しており、糸切り状の痕跡がみられる。2はクロロ土師器の坏である。口径12.8cm、底径7.0cm、器高4.3cmで体部下端および底部に回転ヘラケズリを施す。1・2ともに、9世紀前半の遺物と考えられる。

42号跡は調査区の南側、52号跡の北に位置しており、52号跡の梁方向の柱穴3基により切られている。主軸方向N-30°-W、南北5.9m、東西6mの方形を呈する竪穴建物跡である。第6図-3~6は42号跡出土の土師器坏である。3は口径14.2cm、器高3.4cm、丸底で口縁部がわずかに内湾している。体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリが、内面にミガキが施されている。4は口径13.0cm、器高3.2cmで、丸底、口縁部内面が削られている。内外面に漆仕上げが施されており、ミガキの痕跡は不明瞭であった。体部外面にはヘラケズリが施されていたようであるが、下半は剥落がいちじるしく判別出来なかった。口唇部下半に櫛で描かれたような沈潜が見られる、沈潜は幅0.8mmほどで3条巡っており、3条をひとつの単位としていたようである。5は口径13.6cm、器高3.0cmである。口唇部内面と体部下半に手持ちヘラケズリが施される。口唇部のヘラケズリはナデにより消されている。6は口径14.6cm、底径8.4cm、器高3.5cmである。体部と底部の境に段を有し、体部および底部に手持ちヘラケズリを施す。内面はミガキが施されている。いずれの遺物も6世紀末から7世紀前葉のものと考えられる。

43号跡は42号跡の南西、52号跡の中央北よりに位置しており、N-53°-Wに主軸方向をとり、カマド軸方向で4.8m、横方向4.4mの竪穴建物跡である。52号跡の説明でも記述したように、カマド煙道部をはじめとして建物跡北西部および南東隅を52号跡(掘立柱建物跡)により切られ、欠いている。建物跡は古墳時代後期のものである。

97号跡は105号跡中央部北側に位置しており、カマド方向3.7m、横方向はカマド側で3.9m、入口側で3.2mと逆台形を呈する竪穴建物跡である。主軸方向はN-47.5°-Wであるカマド北側および東壁の一部が105号(掘立柱建物跡)の2柱穴に切られ欠損している。本跡もまた、古墳時代後期の竪穴建物跡である。

掘立柱建物跡の時期と性格

52号跡と105号跡は規模や主軸方位、位置などから考えて、同じような性格を持ち、近接した時期に建てられたものと考えられる。また、その時期については重複する竪穴建物跡との切り合い関係から、7世紀中頃から9世紀初頭の間に造営されたものであろう。しかし、栗焼棒遺跡の集落は7世紀後半（註3）の竪穴建物跡が存在する一方、8世紀代の竪穴建物跡が皆無であり、再び栗焼棒遺跡に竪穴建物跡が出現するのは9世紀に入ってからのことである。8世紀代の竪穴建物跡が皆無という事実は掘立柱建物跡の出現と密接な関係があるのではなかろうか。そこで、古墳時代後期の集落および平安時代の集落と掘立柱建物跡の関係を主軸方向により分析し、その関係をより明確にしてみたい。

第6図は古墳時代後期の竪穴建物跡の主軸方向分布図である。南半分を除き東西に広く分布しているが、分布の主体は $N-30^{\circ}-W$ を中心に前後 20° の範囲に集中している。カマド経軸方向を主軸として使用しているため、カマドを東壁に造ったと考えられる竪穴建物跡は東方向に大きく振れている。これらの $N-40^{\circ}-E$ から $N-80^{\circ}-E$ に主軸方向を持つ竪穴建物跡も上述の集中範囲に入るものと考えられる。

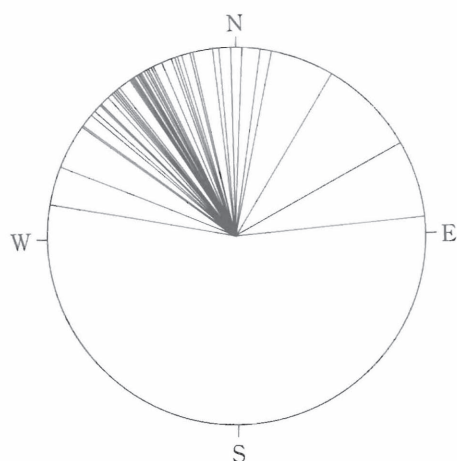
平安時代の竪穴建物跡の主軸方向の分布は第7図のとおりである。真北を中心に前後 40° の範囲に分布しているが、その主体は $N-15^{\circ}-E$ を中心として前後 20° の範囲に集中しているようである。但し、該期の竪穴建物跡は13棟しか検出して

おらず、データ数が不足し、正当な分布傾向を示しているかどうかについては、やや疑問が残るところである。

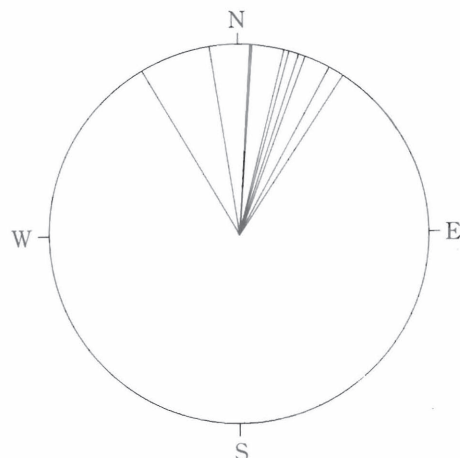
しかし、古墳時代後期の竪穴建物跡が $N-40^{\circ}-E$ に主軸方向をとり、平安時代の竪穴建物跡が真北もしくはやや東よりに主軸を持つことは明白であり、平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡が主軸方向分布において近似する値を示すことは意味のあることであると考えられる。

ここで、他の遺跡の例として東金市久我台遺跡をみてみたい。久我台遺跡は東金市松之郷字久我台に所在する古墳時代後期（6世紀中頃）から平安時代まで連綿と続く集落跡である（註4）。報告書内には各時期の「竪穴住居主軸方位分布図」を掲載しており、それによれば10世紀後半から11世紀の竪穴建物跡以外は $N-40^{\circ}-W$ を中心とした分布傾向を示している。このことは、栗焼棒遺跡の古墳時代後期竪穴建物跡の主軸方向分布と同じであり、その成因について明らかにする必要があるのではなかろうか。（註5）

あらためて本論にもどるが、栗焼棒遺跡において古墳時代後期の竪穴建物跡は主軸方向を $N-40^{\circ}-W$ を中心として建てられており、7世紀の後半まで集落は存続している。その後、真北もしくはやや東に振るようなかたちで掘立柱建物跡が造られたものと考えられる。そして、再び竪穴建物跡が展開するのが9世紀前半であることから、栗焼棒遺跡の掘立柱建物跡は7世紀末葉から8世紀初頭にかけて、それ以前の集落を排除するようなかたちで造営され、9世紀の初頭まで存続していたも



第6図 古墳時代後期竪穴建物跡主軸分布図



第7図 平安時代竪穴建物跡主軸分布図

のと考えられる。

それでは、これらの遺構はどのような性格を持つものであろうか、大規模な掘立柱建物跡が存在する遺跡は豪族居館跡および邸宅跡、寺院跡、官衙跡などが考えられるが、本遺跡のように資料の乏しい遺跡からその性格を決定することは困難である。しかしながら、いくつかの事項を組み合わせることでその性格を検討してみたい。

栗焼棒遺跡出土の掘立柱建物跡について簡単にまとめると、まず、掘立柱建物跡が造営された時期が7世紀末もしくは8世紀初頭から9世紀の前半である。次に、該期の竪穴建物跡が検出されておらず、それ以前から続く集落を排除して造られた可能性が高い。掘立柱建物跡の確認された場所が台地の縁辺に近い部分であり、今後、新たに掘立柱建物跡が確認される可能性が高い。台地中央部北よりに2条の溝を検出しており、これらの溝が掘立柱建物跡と同時期のものであるとするならば、溝の東側に主体となるべき建物跡が存在する可能性がある。周辺に湯坂廃寺跡や真行寺廃寺跡などの古代寺院が点在している。駄ノ塚古墳が隣接して所在しており、岩屋古墳と大畑-I遺跡の関係を考えるならば、郡家の可能性も考えられる。最後に「クリヤキボウ」と言う地名が「厨家」もしくは「厨」および「坊」の音を含んでいる。

これらの事項から考えると、まず、豪族居館跡もしくはそれに続く邸宅跡の可能性であるが、定期的に7世紀の後半に造営が開始され、それ以前の集落を排除して造られており、規模としてもかなり大きなものであったと考えられる。該期の居館・邸宅跡が不明瞭でありはっきりとしたことは言えないが、前段階の集落と隔絶した感があり、一連の流れとして出現すると考えられる居館・邸宅の可能性は少ないと考えられる。

次に寺院跡の可能性であるが、仮に寺院跡にともなう掘立柱建物跡と考えた場合にはこれらの建物跡は僧坊などの附属施設と考えるのが妥当であり、附属施設とすればその本体とも言うべき伽藍は大規模なものと成り得るのではなかろうか。この場合、瓦も大量に確認されても良いように思われるが、今回の調査で出土した瓦は数点に過ぎず、寺院跡の可能性も少ないのではなかろうか。

最後に官衙跡の可能性であるが、造営開始時期やそれ以前の竪穴建物を排除している点、また、

周辺に古代寺院や終末期の大規模な方墳である駄ノ塚古墳などが存在する点などから考えて、その可能性は大きいと考えられる。しかし、一方で官衙跡を示すような墨書土器などの遺物が検出されていない点は問題が残る。

以上のように、栗焼棒遺跡の掘立柱建物跡についてその性格を考えてきたが、現時点では明確な判断は下せないものの、他に比べて「官衙跡」の可能性が高いのではないだろうか。

まとめ

わずかな資料から上述のような考えを述べる危険性は十分に感じている。しかしながら、このような仮説を展開することによって今後の調査を有益なものとする事が出来るであろうし、また、遺跡の性格を把握するための調査を行う必要性を訴えることも出来るのではなかろうか。

発掘調査が終わるといつも「全ての遺構を調査出来たのであろうか。」と思う。今回の調査においても同様であり、特に掘立柱建物跡の検出については「あるという可能性」を意識して探さないことには確認し、建物跡として位置付けることは難しいと思われる。勿論、これを過度に行えば、存在しない遺構を創出してしまうことになるのであるが。

「ふるような星も、見ようと思って見なければ、その半分の光もわれわれの目はとらえない、人間とはそういう主観の動物なのだ」(註6)。

発掘調査において、見ようと意識することは重要なことである。しかし、前述したように意識し過ぎればこれもまた問題である。見ようとする目とそれを正しいものとする経験をもって、今後も良い調査が出来るように努力したい。

なお、今後の調査の一助となればと思い、台地全体が見渡せるような遺構配置図(第8図)を作成した。想像の域を脱しないが、郡家跡の可能性を考え、調査区東端で検出された溝を一辺50mの郡庁の外郭として範囲をおとしてみたものである。

最後に、52号跡の確認調査にご協力いただいた川島忠文氏をはじめとして、様々なご助言をいただいた今泉潔氏、永沼津朗氏、萩原恭一氏、渡邊高弘氏に記して感謝の意を表します。



第8図 栗焼棒遺跡遺構想定図 (1:5,000)

補 註

- 1) 半澤幹雄「(1)山武町栗焼棒遺跡(千葉東金道路二期)」『千葉県文化財センター年報No19』(財)千葉県文化財センター1994
- 2) 渡辺修一「「竪穴住居」か「竪穴建物」か」『研究連絡誌第34号』(財)千葉県文化財センター1992
 によったもので、渡辺氏は「軒」と「棟」という助数詞の意味について触れ、「軒」は家、「棟」は「建物」の助数詞という区分が明確であり、「竪穴住居」ひとつがひとつの「家」ではないと考えられることから、正しい助数詞として「棟」を使用すべきではないかとし、さらに「竪穴住居」が「掘立柱建物」と同様に集落において、さまざまな機能を有していたとする岩崎直也氏の論を挙げ、「竪穴住居跡」のみが「住居跡」と呼ばれる不合理性を指摘している。

筆者も集落跡において、数棟の竪穴建物跡もしくは他の建物跡(掘立柱建物跡や平地式建物跡など)によって一軒の「家」が構成されていたものとするべきであると考え、今後の集落研究において、たとえ現時点では一軒の家の構成を明確に出来ないとしても、上述のような視座

を持つことによってこそ「集落跡」の実像にせまることが可能になると考え、「竪穴建物跡」および「棟」という表現を採用した。

- 3) 飛鳥Ⅲ期に属すると思われる金属器模倣の須恵器高台坏や土師器碗が出土した竪穴住居跡が存在する。
- 4) 萩原恭一・小林信一・神野信ほか『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター1988
- 5) 集落の展開を知るうえで重要な要素のひとつと考えられ、今後、資料整理を行ないそのあり方を把握しなければならないと考える。また、近年まで民家の主屋の方位や他の建物配置には規則性が伴っていたことも事実である。
- 6) 竹宮恵子『エデン2185』(小学館)1985

参考文献

- 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』(塙書房)1994
 阿部善平ほか『季刊考古学第36号 特集古代の豪族居館一』(雄山閣出版)1991
 大野康男ほか『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』(財)千葉県文化財センター1993



写真1 52号跡完掘状況



写真2 80号跡完掘状況